アフリカの今

県人支援の現場から

ザンビア編 ④

現地の人だけで運営

貧困地区の学校

舗装された道路が突然、赤土のでこぼこ道に変わった。通りには、れんがをセメントで塗り固めただけの家が並ぶ。ザンビアの首都ルサカにあるンゴンベ地区。コンパウンドと呼ばれる貧困地区の一角に、吉野川市山川町のNPO法人TICOが開設したコミュニティースクールがあった。

「グッドアフタヌーン、サー」。教室に入ると、子どもたちの元気な声が響いた。くりくりとした目が愛くるしい。通学するのは、地区で暮らす保育園から小学7年生(最終学年)までの約200人。地域住民が運営するコミュニティースクールは、経済的な理由から公立校に通えない子どもたちの大切な受け皿になっている。

「教育レベルは公立校に負けない自信があります。私たちが望んでできた学校ですから」。施設を案内してくれたイブリン・チョラ副校長(54)は、そう言って柔らかな笑顔を見せた。

もともとは1997年、貧しさから栄養失調の子どもが後を絶たないンゴンベ地区で、TICOが母親向けの栄養教室を開いたのが始まりだった。生活改善には収入が欠かせないと洋裁教室も始め、2000年には拠点施設のコミュニティーセンターが完成。母親らの要望で01年に保育園が併設され、子どもの成長に合わせて学校を開設、規模は次第に拡大している。

「こちらの教室に来てください」。チョラ副校長の後に続くと、20~30代の女性約20人が椅子に座って栄養学を勉強していた。今も子どもたちと同じ場所で、多くの母親たちが栄養衛生教室や洋裁教室に通っている。

「これまで約300人の母親が学び、50人ほどの就職に結び付きました。今では、私たちの手でこの施設を運営しているんですよ」。チョラ副校長は誇らしげに語る。

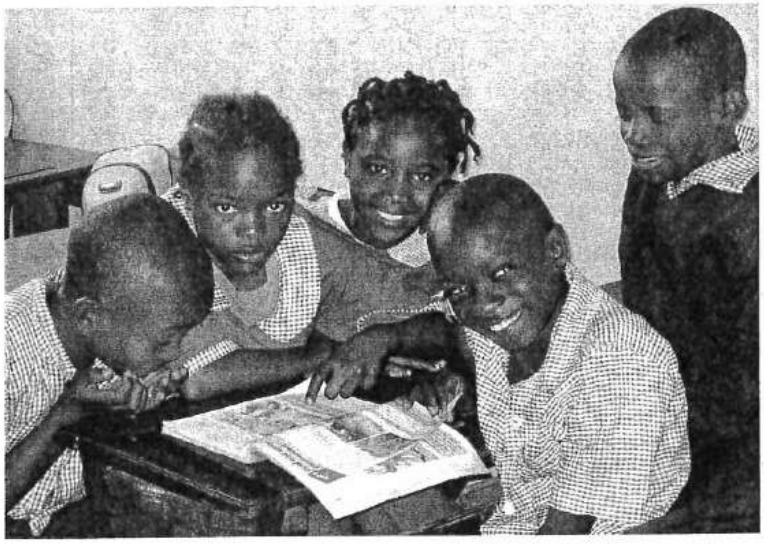
当初はTICOが全面的に運営に関わり、資金や資材も提供していた。しかし、02年にザンビア人だけで構成する運営委員会を結成。加工食品の販売や日用品のバザーなどから収益を得て、独自に資金援助団体も探した。児童数が増えて校舎を増築した07年以降、TICOからほぼ独立した状態になっている。

TICOザンビア事務所の瀬戸口千佳さん(29)=神戸市出身=は「国際協力の成果は、いかに現地の人たちだけで継続してもらえるか。それに尽きます」と話す。ポンプが壊れたままの井戸や物置小屋と化した診療所―。国際協力の現場において、与えるだけの支援で失敗に終わった例は枚挙にいとまがない。

なぜンゴンベ地区で成功したのか、はっきりとした理由は分からない。経営も綱渡りで、さらに規模が大きくなって新たな用地が必要になれば、資金確保が困難を極める恐れもある。

それでも、ほんの十数年前まで、栄養失調のわが子を抱えて途方に暮れるしかなかった母親たちが手に職を付け、子どもたちは学校で輝く笑顔を見せている。

「国際支援は無駄じゃない。きっと意味はある」。瀬戸口さんらTICOスタッフは、そう信じている。(藤長英之)



貧困地区のコミュニティースクールに通う子どもたち=ザンビア・ルサカのンゴンベ地区